

## はじめに——「ニュートンあれ」

一六九九年、二月の初め、中堅どころの政府の役人が一人、ドッグというパブの静かな片隅に身を置いていた。服装は申し分ない。もう三年ばかりこの仕事を続けているだけに、ホルボーンやウエストミンスター周辺で、いかにも王立協会員らしい身なりをして人目を引くほど愚かではなかった。

そのパブは、男二人が目立たずに話すにはうってつけだと思えた。ロンドンは大都市には違いないが、いまだに非常に小さな街でもある。それなりの職業についていれば——それがまともな職業であろうとなかろうと——互いに顔見知りである場合が多い。

待ち人が店に入ってきた。おそらく、つき添いは後方に控えていて、離れたところから監視しているのだろう。入ってきた待ち人も、決まりを心得ている——その男の住まいがニューゲイト監獄であることを踏まえれば、それも当然ではあった。

囚人は腰を下ろし、話を始めた。

監獄で親しくしている男がいて、その男が話好きなのだという。だが、その男は用心深く、賢明で、話し相手を頭から信用したりはしない。話し相手がどういう連中かを考えれば、無理からぬことだ。みな同じく裁判を待つ身なのだから。だが、何週間も何ヵ月も監房ですごし、変わり映えのしない顔ぶれで単調な生活を送るうちに、男の態度にも変化が現れた。そもそも監獄では、話をする以外何もすることがない。

耳を傾けていた役人は、次第にじれったくなくなった。その同房者は何を話したのか？ 聞くに値するだけの情報があるのか？

いや、たいしたものはないだろう……おそらく。すると囚人が言った。道具がある、何かが刻んである板だ——知っているか？

役人は知っていた。

その板は隠してあるのだと囚人は話した——そんなことはわかっている。何のために、おまえをあの監房に入れたのか。板が隠してあることはもちろんのこと、どこに隠してあるのかを、探るためではないか。

おまえを生かすも殺すも自分の心一つだと、もう一度わからせてやるまでもあるまい。

この情報提供者が言うには、板は、ウィリアム・チャロナーが贋金作りに最後まで使っていた何軒かの家のどれかの、壁の中だか隙間だかに隠してあるらしい。

どの家だ？

情報提供者は知らなかった。だが、チャロナーは、あんなに何もなさそうところは絶対に搜索されないかと豪語していたようだ。

役人は、苛立つ気持ちを呑み込んだ。チャロナーが決してばかでないことは、すでにわかっている。今、欲しいのは、チャロナーの首根っこを押さえるための何かだ。

看守たちが役人の様子を見て取った。もつと結果を出せと命じられた罪人を、ニューゲイトへ連れ戻す時間だ。

囚人たちが去ってから、役人は一人で店を出た。街の中心部へ戻り、西の正門からロンドン塔へ入った。

それから、左へ向かって王立造幣局の構内に入る。そこで、いつもの仕事に戻るのだ。目撃者を尋問したり、供述書を読み返したり、署名すべき自白調書を確認したりする。

彼はそのような仕事をこなして、ウィリアム・チャロナーを絞首刑に処すための強力な証拠を積み上げていった——いや、チャロナーに限ったことではない。王立造幣局監事であるアイザック・ニュートンは、贋

金作りと見ればすべて同じように追い詰めた。

アイザック・ニュートン？ 近代科学の礎を築いた人物。当代から現代に至るまで、あらゆる人々から史上最高の自然哲学者と認められている、あのニュートンのことなのか？ 宇宙に秩序をもたらした人物が、犯罪と刑罰、怪しげなロンドンのジン酒場に安アパート、贖金やまやかしといった問題と、どんなかかわりを持っていたというのか？

アイザック・ニュートンの最初の職業、唯一の誰もが知る職業は、三五年にわたって続いた。その間、ニュートンという人物は、ケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジから決して離れないように思われていた——初めは学生として、次にフェロー「カレッジの教官」として、そして最終的にはルーカス教授職に就いて、長年大学に残っていた。ところが一六九六年、ニュートンは王立造幣局監事の職を引き受けて、ロンドンへ向かう。その職に就いたからには、法律上も伝統上も、国王の通貨を守る義務が生じた。すなわちニュートンは、通貨をごまかしたり偽造したりする者がいれば、それを阻止しなければならないし、その人物を捕らえなければならない。彼は、まるで警察官のように——というよりも、犯罪捜査官と尋問官と検察官の仕事を一手に引き受けたように、職務を遂行していった。

このような役職を担う者として、彼ほど意外な候補もないだろう。ニュートンは、現代の人々の認識においても、偉人として崇められた当時の認識においても、およそ悪事とはかかわりがない。彼にとつて生きることとは、むしろ考えることであり、しかも、凡人よりもはるかに高いレベルでものごとを考えていた。アレキサンダー・ポープは、かのカプレット(二行連句)で、彼に対する当時の人々の心情を表現した。

自然と自然の法則は夜の闇に隠されていた。

神は仰せになった。「ニュートンあれ！」と。すると、すべてが明るくなった。

ニュートンは、日常的な欲望や混乱を超越して生きていた。あるいは、そのように生きていたと思われる。たゆまず進歩する知の世界において、彼が比較的早くから後進の者たちの間で聖人化されていたことを鑑みれば、ベンジャミン・フランクリンが一七六六年にロンドンを訪れた際に依頼した肖像画が、自身が机に向かって研究しているところをニュートンの胸像が見守るといふ構図であつたのも、決して偶然ではない。

ニュートンは、人やものごとの管理について訓練も受けていなければ、経験もなく、さほど興味を持つていたわけでもないのに、造幣局監事の職務に手腕を発揮した。在職中の四年間に、追跡し、逮捕して起訴した貨幣偽造者や贋金作りは、数十人に上る。彼は、証拠、不用意な会話、裏切りなどを利用して複雑に紡いだ網に、敵を引っかける方法を知っていた——というよりも、そういう方法を瞬時に会得したのだ。ロンドンの裏社会は彼のような人物と対決した経験がなく、裏社会に生きる者のほとんどは、ヨーロッパ随一の頭脳と戦う準備などまったくできていなかった。

とはいえ、準備不足だつたのは、ほとんどの者であつて、全員ではない。なかでも、ウィリアム・チャロナーは、ニュートンが自分の並外れた知性に対抗し得ると認めた敵だつた。チャロナーが犯したのは、些細な罪ではない。彼自身が偽造したと主張する三万ポンドという額は、かなりの大金だ——現在の貨幣価値に換算すれば、四〇〇万ポンドに相当する。チャロナーは、金融や硬貨製造の技術に関して自身が書いたパンフレットを議会に提出するほどの教養があり、少なくとも六年にわたつて犯罪に意欲を燃やしながらも起訴を免れ続けるほど、抜け目がなかつた。彼は過ちを容赦せず、彼のせいで少なくとも二人が死に、その死に

よって彼は利益を得た。そして何といつても、彼は大胆だった。新監事を無能呼ばわりして、造幣局のやり方は詐欺だとまで非難した。そのような調子で、二人は二年以上も熾烈な戦いを続け、戦いが終わる頃には、ニュートンによるチャロナーの追跡は、第一級の実証的研究と呼ぶにふさわしいものとなっていた。彼はその追跡の過程で、かつてはあまり知られていなかった、聖人としてのニュートンよりもずっと人間味のある、わかりやすい人格をあらわにしてもいる——彼は、科学革命という知の変革を単に推し進めただけでなく、当時の科学者たちとともに変革を日夜肌で感じ、考えをめぐらせ、身をもって実行した人間であったことが明らかにあったのだ。

アイザック・ニュートンは社会に知の変革をもたらしたが、彼自身も変革を遂げながら人生を歩んだ。名うてのチャロナーを捕らえるからには、それ相応の思考習慣が身につけていなければならぬ。そのプロセス、すなわち、歴史上最も想像しがたい刑事が生まれるプロセスの始まりは、一人の青年が高等教育を受けるために、リンカシャーのある小さな町の門を歩いてくぐった日にまで遡る。



偉大なる自然哲学者





## I 「神以外の」もの

一六六一年六月四日、ケンブリッジ。

グレート・セント・メアリー教会の塔に日の名残が差す頃、一人の若者が街の中へ入ってきた。およそ一〇〇キロメートルの道のりを、徒歩で来たのは間違いない（几帳面に記録された何冊かの出納帳を見る限り、馬の借り賃を支払った痕跡はない）。田舎のリンカンシャーから大学まで、三日かけて旅してきたのだ。トランピントン通りとキングスウェイに各カレッジの塀の影が落ち、この時刻では、トリニティ・カレッジは来訪者を受けつけていなかった。

若者は、その夜は宿に泊まり、翌朝八ペンスを支払って馬車でカレッジへ向かった。そして数分後には、トリニティ・カレッジのゴシック様式のアーチ、グレート・ゲートをくぐり、カレッジの職員に申し出て通常の入学試験を受けた。吟味するのにさほど時間はかからなかった。カレッジ・オブ・ザ・ホーリー・アンド・アンデイバイディッド・トリニティ（トリニティ・カレッジの正式名称）の記録によれば、その若者、アイザック・ニュートンは、一六六一年六月五日、入学を許可された。

表面上は、ニュートンのトリニティ・カレッジ入学に特別な点は何もなかった。彼も、世の中で何ごとかを成し遂げようと大学へやってきた農家出身の頭脳明晰な青年という、典型的な学生の一人と見られていたに違いない。それも、あながち間違いではなく、当時一九歳のニュートンは確かに田舎育ちだった。だが、

カレッジの中庭であるグレート・コートに足を踏み入れた時点で、彼が田舎暮らしにまったく適していないことは、すでにはっきりしていた。やがて、彼がかつて例にない学生であることが明らかになっていく。

子ども時代のニュートンに、将来を予感させるような気配はなかった。一六四二年のクリスマスの日にはナ・ニュートンが産んだ男児はかなりの早産で、乳母によれば、クオート〔約一リットル〕用の水差しに入っ  
てしまふようなほど小さかったという。生後一週間が過ぎるのを待つてから、三カ月前に亡くなった父と同じ名が彼につけられた。

幼いアイザックは、それなりに裕福に育った。父は、「ウールズソープの莊園領主」ともつたいぶつた名をつけた農地を含め、十分な土地を残してしてくれた。しかし相続財産は、まだ赤ん坊であったアイザックの母に差し当たり委ねられ、母はその後間もなく再婚することになる。ハナの二人目の夫は、バーナバスのミスという地元の現役の聖職者で、かなりの不動産を所有し、六三歳ながらあつぱれなエネルギーを持ち合わせていて、新妻との間に八年間で三人の子どもをもうけた。だが、こうした活気あふれる結婚生活のなかに、足手まといになる幼児の居場所はなかつたようだ。二歳を過ぎたばかりのニュートンは親元から離され、祖母の手で育てられることになった。

必然的に、ニュートン少年は自力で生き方を学んでいった。何世紀も昔の人物の精神分析をするのは愚かだが、記録上では、成人してからのニュートンは、一度くらいは例外はあるとしても一切他人に甘えようとしなかつた。幼少期の辛い体験も、彼の聡明な頭脳には何ら影響を与えなかつた。一二歳になったニュートンは故郷の村を出て、数キロメートル離れた商業都市、グランサムへ移り、グラマースクールへ通うように

なった。入学した時点から、彼の知性が他のクラスメートと異なるレベルにあるのは明らかだった。基本的なカリキュラム——ラテン語と神学——において、彼が手を焼くような問題はほとんどなかった。当時の同級生の回想によれば、ときおり「平凡なできの生徒が彼の席次を抜かそうものなら」、彼は少しばかり苛立ちを見せて、「いつでも簡単にその生徒を抜き返す余力を発揮した」らしい。

そういう邪魔が入らなければ、ニュートンには自分なりの楽しみがあった。「鳥や獣や人や船」の絵、あるいは、チャールズ一世やジョン・ダンの肖像などを、部屋の壁を埋め尽くすほど熱心に、みごとに描いた。また、彼は機械仕掛けの発明にも夢中で、道具の扱いに長けており、自分の楽しみのために水車を作ったり、下宿先の娘のために人形用の家具を作ったりした。さらに、時間というものにも魅了されていた彼は、水時計を設計して製作したり、日時計を作ったりしたが、その日時計はたいへん正確で、家人や隣人が「アイザックの日時計」と呼んで、時間を知るよりどころとするほどだった。

このように、好奇心にあふれ実証主義的な知性の持ち主であった様子は、彼の死後間もなく、つまりこの青年時代から七〇年ほど後に集められたわずかな資料に垣間見られる。彼の直筆による何冊かの筆記帳も、そうした素顔を示す資料で、古いところでは一六五九年の筆記帳が残されており、彼自身の考えや疑問、着想などが、小さな文字で（上質の紙に）記録されている。たとえば、その一番古い筆記帳に記されているのは、インクの作り方や、「死体の色」を含むさまざまな色を作るための顔料の混ぜ方だ。また、鳥を「酔っ払わせる」方法や、生肉の保存法（「しっかりと蓋のできる器にワインを入れて肉を浸す」と記された後に、「水ですすげばワインの味はしないだろう」と希望的観測がつけ加えられている）についても記述がある。さらに彼は、永久運動機関について独自の案を述べ、疫病の治療薬についても次のように怪しげな自説を提示している。「熟したアイビーベリーの粉末をたっぷりと摂取する。その後、馬糞を搾った液を摂取する」。また彼は、言葉の収集魔でもあったらしく、ページをめくってもめくっても名詞ばかりを列挙している箇所

があり、その数は二〇〇〇語以上にのぼる——「Anguish. Apoplexie... Bedicke. Bodkin. Boghhouse... Statesman. Seducer... Stoick. Sceptick」

その筆記帳には、他にも一覧があった——母音の音声表、星図などだ。事実の積み重ね、彼自身の見解、他の書籍から拝借した引用、「おこり（マリア）の治療薬」（キリストが十字架の前で震えているイメージを喚起する）から始まって天体観測にまで至る考察。筆記帳のページに浮かび上がる彼の知性は、あらゆる不確実な事象を掌握しようと励み、秩序のない世界に秩序をもたせようとする知性だった。

とはいえ、当時一六歳のニュートンには、自分の能力を人生にどう生かせばよいのかがまったくわからなかった。グラマースクール時代の実習帳を見ると、彼がたいへん惨めな気持ちであったことが感じ取れる。その実習帳は、彼が文字で純粋に絶望を表現した唯一の記録で、「小さなやつ、誰にも助けてもらえない」と嘆き、「何の仕事が向いているのか？ 何が得意なのか？」と問いかけているが、その答えはない。そして「誰も私を理解しない」と抗議し、最後には、「私は何になるのか。もうおしまいだ。ただ、泣くしかない。何をすればよいかわからない」と落胆している。

ニュートンが嘆く一方で、彼の母親は見返りを求めた。アイザックが学校で習うことに飽き足らないというのなら、もう家へ戻って生涯をかけるべき仕事をしてほしい——羊の世話をして、穀物を育ててほしいというのだった。

しかし、記録によれば、アイザック・ニュートンは救いようのない農夫だった。農夫の仕事をこなす気など、さらさらなかった。市場へ行かされる際には、使用人と一緒にグランサムのサラセンズヘッドという宿屋の厩に馬を入れて自分だけ姿を消し、蔵書目当てに元の下宿へ一目散に向かった。あるいは、「家からグランサムへ向かう途中で勝手に寄り道し、使用人がグランサムで商売を終えて戻るのを、生垣の下で勉強しながら待つ」ということもあった。家の農地でも、彼は自分が果たすべき義務にまったく無頓着だった。そ

れどころか、「水車とダム」を作ったり「さまざまな流体静力学の実験を行ったりして、夕食を忘れるほどそれに没頭した」ようだ。母親から何か言いつけられても——羊の世話をしなさいとか、他の「家畜の番をしなさい」とか——ニュートンはたいいていそれを無視した。「彼の一番の楽しみは、本を手にして木陰に座ることだった」のだ。その間に、羊の群れは迷子になり、豚は隣家の畑の穀物に鼻をつっこんでいた。

ニュートンを田舎に落ち着かせようとしたハナの日論見は、九ヶ月で崩れた。彼が家を離れることができず、二人の男のおかげだ。一人は聖職者でありケンブリッジ大学の卒業生でもある叔父で、もう一人はグランサム学校の校長、ウィリアム・ストークスだった。ストークスは、彼を大学へやってほしいと母親に頼み込んでくれた。ハナは、出生地がケンブリッジから一マイル以上離れている入学希望者に課せられる四〇シリングをストークスが肩代わりするという約束で、ようやく折れる気になった。

ニュートンは一刻も無駄にせず、すぐに村を出た。新学期が始まるのは九月だったが、一六六一年六月二日にはウールズソープを後にしている。荷物はほとんど持たず、ケンブリッジに到着した時点で彼の部屋にそろっていたのは、洗面台と尿瓶、クオート入りの瓶、そして「その瓶一杯分のインク」だけだった。こうしてアイザック・ニュートンはトリニティ・カレッジに住居を定め、その後の三五年間をここで暮らすことになる。

ケンブリッジでのニュートンは、貧乏という不運に見舞われた——というよりも、ハナのせいで貧乏だった。相変わらず学校教育を見下していたハナが、大学生の息子に年間で一〇ポンドしか仕送りをしなかったからだ。食費、下宿代、授業料をすべて賄うには不十分な額であったため、ニュートンは準免費生としてトリニティ・カレッジに入学した。授業料を免除してもらおう代わりに、裕福な家の子弟が自分ではしないような雑用を行うのだ。ほんの数日前までは恵まれた農家で自分専用の使用人がいる環境にあったというのに、

仲間が食事をやる際には給仕をし、残り物を食べ、彼らに薪を運んでやり、尿瓶の尿を捨ててやらなければならぬ。

だがニュートンは、免費生の中で誰よりも惨めだったというわけではない。一〇ポンドの仕送りにはそれなりの価値があったし、トリニティ・カレッジのシニアメンバーに親戚のつてがあった。また、ある程度の嗜好品が買える程度の余裕もあった。さくらんぼやマーマレードを自腹で買うこともあれば、牛乳、チーズ、バター、ビールといった必需品も自前で調達できた。しかし入学後の数年間、彼はトリニティ・カレッジ内の階層の最下位にあり、人が座っているときにも自分は立っているしかなく、カレッジという社会において何の重要性もない人間だった。学部生の期間は、まったく目立たない存在のままだった。彼が交わした書簡は、学士号を取得した五年後の一六六九年にカレッジの同輩に宛てた一通だけしかない。また、ニュートンの伝記作家の第一人者であるリチャード・ウエストフォールが明らかにしているように、ケンブリッジの同年代の中で飛びぬけて有名な存在となつてからも、彼を知っていたと認める者は、かつてともに学んだはずの仲間には一人もいなかった。

ニュートンがどのような気持ちでそうした孤独に耐えていたのか、それを直接知る証拠はない。だが、有力なヒントは残されている。彼の筆記帳は、ほとんどが出費の記録や幾何学のメモで埋め尽くされていたが、一六六二年の数ページには、まるで罪業という債務の帳簿ではないかと思えるほど、犯した罪が大小を問わず次々と書き込まれ、厳しい債権者、すなわち神への借りが計上されている。

彼は筆記帳の中で、同級生らに対して働いた悪事を認めている。「エドアルド・ストローラーからさくらんぼ入りパンを盗んだ。そんなことはしてないと否定した」、「母の砂糖漬けプラムを勝手に盗った」、「デロシー・ローズのことをあばずれと言った」。また、激しい衝動にかられて暴力を振るったことも記している。「妹をひっぱたいた」、「みんなを殴った」、「自分の死を願ひ、他人の死を望んだ」。母親の再婚についても残

酷なコメントがあった。「父母であるスミス夫妻を家ごと焼き殺すと脅した」。

彼は、暴食の罪についても二度認めていて、一度は、「真鍮の半クラウンで支払いをごまかそうとした」らしい——後に贖金作りに懲罰を与える仕事に就く男の告白としては、相当なものだ。積もりに積もる神への罪をごまかすと白状している。他愛のない、「安息日に水をまいた」、「日曜日の晩にパイを作った」といった罪に始まり、「自分の心に任せて、主をおろそかにした」、「無条件に主を愛さなかった」、「主よりも人を畏れた」と、許されざる過ちについても苦悶の告白を行っている。

とりわけひどいのは、彼が挙げた五八の過ちの二〇番目で、「快樂を覚え、主よりも金に心を向けた」という断罪だ。衝動、金、快感は、敬虔な信徒にとっては悪魔の誘いだ。けれども、ニュートンにとって本当に危険な誘惑は、エデンの園のイヴが負けたのと同じ誘惑だった——知識というものをやみくもに愛していたからだ。ニュートンはトリニティ・カレッジで、田舎の生活では触れることのできなかった知識の世界に足を踏み入れ、頭や心から神が追い出されてしまうほどの猛烈な勢いでその世界に没頭した。

とはいうものの、ニュートンはケンブリッジにおいても、我が道を行かねばならなかった。アリストテレスを何よりの権威と位置づける伝統あるカリキュラムが、自分にとっては時間の無駄であることにたちまち気づいたからだ。彼の読書帳を見れば、指定されたアリストテレスのテキストは、一度たりとも読み通していないことがわかる。彼はその代わりに、新しい知識の習得に取りかかった。伝統ある権威の砦をすり抜けて、ケンブリッジにもじわじわと入り込みつつある知識だった。ニュートンはほぼ独学でそうした知識を得ていった——というよりも、独学でやるしかなかった。なぜなら、彼の理解は大方の教授陣を凌ぎ、彼を指導できる力のある教授は、わずかに一人か二人しかいなかったからだ。

ニュートンが初めに手つけたのはユークリッド幾何学だったが、一読しただけで、その理論が「あまり

にも簡単なので、これを証明して喜ぶ人がいるのだろうかと思つた」そうだ。彼は続いて数学の他の分野も習得し、やがて機械論哲学を発見した——すべての物体は運動の法則によつて理解できるといふ考え方だ。これは賛否両論を呼ぶ発想だつた。この考え方によつて、日常における神の重要性が損なわれると感ずる人が少なからずいたからだ。だが、たとえそうであつても、デカルトやガリレオをはじめとする多くの学者がすでにそうした新しいアプローチの有効性を提唱しており、その機械論的世界観は、ヨーロッパの知識人のたまり場であるケンブリッジ大学に在り、受容力のある少数の人々には支持されることとなつていた。

語りぐさとなつてゐるニュートンの研究に取り組む能力は、このときから、すなわちヨーロッパの知識人の中で取りざたされる物質の世界というものについて極めようと猛然と立ち向かつたときから、すでに発揮されてゐた。睡眠はときおり取るだけだつた。ニュートンの一年半後にケンブリッジに入學したジョン・ウィキンスによれば、研究に没頭してゐるときはニュートンはとにかく眠らなかつた。また、食事は單なる燃料であり、多くの場合、思考の妨げにしかならなかつた。後にウィキンスは、飼ひ猫がニュートンの食べ忘れた食事をちようだいするので太つてしまつたと姪に話してゐる。

一六六四年、ニュートンは苦難の二年を経て、學んだことを『若干の哲學的疑問』という謙虚な題の記録にまとめた。その中で、彼はまず物質の最初の形、すなわち最も基本的な形は何かと問ひ、詳しい分析を経て、物質の基本とは原子という單一で不可分な存在に違ひないと論じてゐる。また彼は、場所（宇宙空間における位置）、時間、天体の動きの本當の意味についても疑問を提してゐる。一時的ではあつたが新たな師としていたデカルトについても丹念に調べ上げ、デカルトの光学理論、哲學、潮の干満に関する説に疑問を示した。またニュートンは、感覺の働きについても理解しようとしてゐた。さらに、スターブリッジ市で購入したプリズムを用いて一六六三年に行つた、光と色に関する研究の出発点となる初めての光学実験についても記してゐる。また、重力というものの特性について明確には理解してはゐないものの、物体の運動や、

落下物体が落下する理由についても疑問を持っていた。そして、真に機械論的な世界に生きるとは、心と魂以外のあらゆる物質が形成する壮大で複雑な仕組みの中で生きるとはどういうことなのかを理解しようと試みた——その結果、そのような世界における神の立場に気づき、身震いした。彼は「一番最初に存在したものが、神以外のものに由来するのは矛盾だ」と記したが、後に「神以外の」という言葉は線で消された。明確な答えが出ていたわけではない。この記録は、自分の理論を極めていくうえで習作だった。しかし、そこには彼のあらゆる理論の芽が詰まっており、それが後年の大発見につながり、さらに多くの発見を促す法則の考案につながった。ニュートンの学説が集大成されるのはまだ数十年先の話だが、『若干の哲学的疑問』には、学問の世界の末端で研究に取り組む無名の学生、アリストテレスともデカルトとも他の誰とも異なる独自の説を持つ学生の、驚くべき熱意が込められていた。

ニュートンは、自分が知りたいと思えばどんなことでも、恐れを知らずに追求した。視覚が惑わされて実在しないものが見えることがあるかどうかを知るために、痛みを我慢できなくなるまで片目で太陽を直視し、その後「強い幻覚」が見えなくなるのに要した時間を書きとめたこともある。その一年ほど後には、視覚系の状態と色覚の関係を理解したくて、細い金属棒——先の丸い針——を「眼と骨の間の、なるべく目の裏側に近いところまで差し込んだ」。そして、「金属棒の先で眼球を押すと（そうして眼球の湾曲の度合いを変えると）、いくつかの「白と黒と色のある円」が見えた。金属棒の先で目をこすると、その円のパターンはさらくつきりと見えたという。ニュートンはその解説に図をつけているので、ピンが眼をゆがめる様子がよくわかる。挿絵を見ると思わず顔をしかめずにはいられないが、ニュートンは痛みについてはまったく触れておらず、恐怖についてもまったく記載がない。疑問があり、答えを得る方法がわかっている以上、次にすべきことは決まっているというわけだ。

彼はさらに研究を進め、空気の性質について思索し、真空の中で火は燃えるのだろうかと考え、彗星の動

きを記録し、記憶の謎や、魂と脳の不思議で矛盾した関係について考察した。しかし、次々と押し寄せる新しい考えや新しいアイデアに夢中になってはいても、学生としてあたり前の試験を避けて通ることはできなかった。一六六四年の春、ニュートンは、ケンブリッジの学部生に課せられる試験を受けた。トリニティ・カレッジのスカラー「特待生」になれるかどうかが決まる試験だった。合格ならば、もう免費生ではなくなり、大学が食費を持ち、修士の学位を取得するまでの四年間、わずかながらも給料を支給してくれる。不合格ならば、農場へ帰るしかない。

彼は試験を乗り越え、一六六四年四月二八日、スカラーの資格を手にした。ところが、トリニティ・カレッジで新たに始めた研究は、一年もたないうちに中断されることになる。一六六五年の初め、テムズ川の栈橋にクマネズミが現れた。英蘭戦争の捕虜や大陸から密輸した綿花の積荷とともに、オランダ經由の船に紛れ込んでいたと思われる。クマネズミとともに北海を渡ってきたのがノミで、そのノミがイングランドにペスト菌を持ち込んだ。クマネズミの血を吸ったノミが今度は人を刺し、ペスト菌が人の血液に入り、黒死病が広がり始めたのだ。イングランドは、またもや腺ペストの流行に見舞われることになった。

当初、ペストの広がりはずつくりで、日常の中の厄介なできごとという程度にとらえられていた。最初の犠牲者とされる人が死亡したのは四月一二日で、その日のうちに大急ぎでコヴェント・ガーデンに埋葬された。サミュエル・ピープスは四月三〇日の日記に、「疫病がたいへん心配されている」と記している。けれども、イングランドがローストフト沖海戦でオランダに勝利した結果、ピープスをはじめとする多くの人々はペストのことを少し忘れかけた。だが六月の初め、ピープスは「そんなつもりはまったくなかったのに」、気がつくどトルリー・レーンを歩いていて、「扉の上に赤い十字の印がつけられて『神のご慈悲を』と書かれている家を二、三軒、目にした」。

その日ピープスは、「不安を取り除いてくれる」噛みタバコを一巻き買った。だが、疫病は街に根を下ろ

し、どれほどニコチンを摂取しようと恐怖は治まらなかった。ロンドンでは一週間で一〇〇〇人が死亡し、やがてそれが二〇〇〇人になり、九月には一日の死亡者が一〇〇〇人となった。

この頃になると、遺体があまりにも多すぎて、葬式という概念も崩壊していた。遺体を廃棄するだけ、地面に掘った穴を遺体で埋め立てるだけで精一杯だった。ダニエル・デフォーは次のように記している。一台の死体運搬馬車が墓地に入ってきて、巨大な穴の前で止まった。男が一人、家族の亡骸の後から歩いてきた。そして「馬車が向きを変えたとたん、死体が無造作に穴の中に投げ込まれるのを見て、愕然とした。少なくとも、丁重な扱いはしてもらえらると思っていたからだ」。しかし実際には、馬車に積まれていた「一六、七体の遺体は、リンネルのシーツやぼろ布に包まれているものも、裸同然のものもあったが、いずれにせよ、巻きつけてあるシーツや布は馬車から放り投げられる際に取れてしまい、みんな丸裸で穴に落ちた。死んだ人たちにとってはどうでもよいことであり、みだらだと感じる者もいなかった。彼らはいわば人類の共同墓地の中で、身を寄せ合って死んでいた」。これこそが民主主義であり、「そこには違いなど何もなく、貧乏人も金持ちも一緒に横たわっていた。他に埋葬の方法はない。あるはずもない。このような災厄のさなかに、膨大な数の死体を一つひとつ棺に納めるわけにはいかなかった」。

街を出られる者はさっさと脱出していたが、感染者も逃亡したために、ペストの恐怖は次第に地方へも広がっていった。住人が早々に避難していたケンブリッジは、一六六五年の盛夏にはゴーストタウンとなっていた。イングランド最大のスターブリッジ市も開催が中止された。大学もグレート・セント・メアリー教会で行う礼拝を取りやめ、トリニティ・カレッジも八月七日には、「ペストの流行に際して帰郷するすべてのフェローとスカラーには」通常の俸給を支払うことを明らかにした。

ニュートンは早々と、八月の俸給支払いの前にケンブリッジを出て、ペスト菌を保持するクマネズミとも感染した人とも接触の機会がない、隔絶した土地であるウールスロープに避難していた。本人は、環境の変